

2021/7/8-3

(うと Q 世話し「何故我が国だけデフレから抜け出せないのか」3/4)

以下は、昔の自分とその周りの家庭から見た限られた世界の中での話で、すべてに当てはまるとは言えそうもありませんが、当命題に関する何かのご参考になるかもしれませんので、書かせて戴きます。

本稿でお話いたしますのは、特筆すべき我が国固有の層によるデフレへの影響についてです。

昨今ではその層は、崩壊しつつあるようですが、当時はかなり幅を利かせていた様な気がします。

では、その特筆すべきわが国固有の層とは何か？

それは各国から見て抜きんでてその比率が高い「専業主婦」の層と一度就職すると終生、同じ公的、私的企業の同じ職場という労働流動性皆無というのが大方で、文理系比率から言うと圧倒的多数派の文系スタッフ職インテリ層の存在でした。しかも当時の序列から言えば営業、生産現場よりも圧倒的に本社スタッフの方が上と格付けられておりました。

その男女が「3高」を軸に結婚をし、一時これらの夫婦層が我が国のオピニオンリーダー的存在であったインテリ家庭層の多くを占めておりました。

(注釈：スタッフとはラインに対する言葉で、御本社様と現場工場の比較イメージです。又3高とは高学歴、高収入、高身長を意味します)

斯くいう自分の出身家庭もこれを絵に描いた様な家庭でした。

父は法学部出身で、当時会社の中で出世コースの最右翼とされた総務部に属し、母は高等女学校の学徒動員により縫製工場で働いた以外は職場経験全くなしの専業主婦でございました。

只、他と違っていたのは、父は正論を述べて上司の怒りを買って「スタッフがラインに行ったらどういう事になるか」の目論見で、当時としては大左遷である製品事業部に飛ばされ、そこで「目論見通り」経営手腕を発揮できなければ「絶海の孤島支店御一人様店長の辞令必定」の苦勞を味わった事と、母は専業主婦とはいえ、兎に角働く事が好きで、朝は4時から夜は父が帰宅する12時近くまで毎日働き詰めに働いていておるところでございました。まるで泳いでいないと死んでしまう回遊マグロみたいに働き続けておりました。昭和40年代の事です。

同じ昭和40年代の同僚世代の一般的な労務環境と言え、上述の通り業種間はおろか社内労働流動性すら殆どなく、スタッフ(事務系管理部門)からライン業務(営業や生産などの現場業務)に職種変わりする事は皆無と言ってよく、その頃急速に広がり始めた中産階級の専業主婦は、当時の流行語でいう「有閑マダム」となって持て余し気味の時間を社会に向け始め、その中でも夫婦共々アメリカナイズする事を信条とする「有閑インテリ専業主婦」が夫の立場を通して影の実効支配層となり世の中に隠然たる影響力を持ち始めた頃でもありました。

アメリカと言えば別称「訴訟大国」でもあり、そういった思潮もオピニオンリーダー的文系インテリ家庭層に流れ込んできていたように思われます。

(続く)